平成３年４月１６日第三種郵便物認可　平成２４年１２月１５日発行（隔月１５日発行）第２７巻　第４号　通巻２４０号

Bulletin

2013 1
Vol. 240

The Japan Institute of Architects Kanto-Koshinetsu Chapter

COLONNADE

特集：JIA 建築家大会 2012 横浜

・JIA 建築家大会 2012 横浜を終えて ―― A.A プランニング　青木恵美子　2
・横浜近代建築展 ―― アマテラス都市建築設計　山口　賢　2
・エクスカーション・横浜街歩き ―― カサイ アーキテクチュラル デザイン　笠井三義　3
・木材サミット展 ―― アトリエ秀　高橋隆博　4
・「建築家の住宅模型展」 ―― 寺山建築工房　寺山　実　4
・「3．11とグローカルデザイン」シンポジウム ―― 連健夫建築研究室　連　健夫　5
・賛助会サミットを振り返って ―― 三菱地所設計　渡邉顕彦　6

FORUM

建築家のための耐震設計教本　新訂版 ―― 日本設計　安達和男　7
JIA 国際戦略とアルカシア ―― 芦原太郎　8
アルカシア大会報告 ―― 佐野吉彦　8
理事会報告 ―― 藤沼　傑　9
「漆」という現代 ―― 京都大学大学院　岸　和郎　10
抱 負 ―― 日建設計　伊藤佐恵　11
周辺から考える ―― NAKANO☆DESIGN　中野一敏　11
保存問題埼玉大会 ―― こうだ建築設計事務所　三浦清史　12
保存問題大会 ―― 左知子建築設計室　左　知子　13
「常識について」 ―― JJ DESIGN　竹内裕二　14
「第２回地域サミット」in 新潟 ―― DESIGN空　塚本久志　16
千葉地域会　活動報告 ―― 桑田建築設計事務所　櫻井　修　17
真に UIA 準拠の「アーキテクト」資格を求める ―― イデア建築研究所　近藤弘文　18
選挙公報 ―― 19

BACKYARD

映画紹介「北のカナリアたち」 ―― ヒガノ　立石博巳　22
広報からのお知らせ ―― 22
こんな本を読みました「沢田マンション超一級資料」 ―― スタジオエイチ　杉山英知　23
編集後記●「新年を迎えて」 ―― 23

社団法人日本建築家協会 関東甲信越支部　〒150-0001　東京都渋谷区神宮前 2-3-18 JIA 館
Tel: 03-3408-8291 Fax: 03-3408-8294　http://www.jia-kanto.org/members

ど地場材を活かし、循環構造の空間に空気の循環と周囲の植栽による微気候をつくり、土壁を取り入れ周囲の景色を楽しみながら快適な生活を実現して、ほとんどクーラーを使わない。

そして沖縄支部の金城　司さんは、「沖縄の住宅事情」：台風通過地域のため、県内の住宅の70%近くがRC造。抽象的な表現と快適な住宅の融和をテーマに設計している。大きな開口部により、ほとんどクーラーを使わない生活が可能。住宅新聞という情報の媒体などが沖縄では普及し、多くの県民と建築家を結び付けている。

4地域のセミナーは地域の風土により、それぞれの異なった解決方法で、住む人にとって快適な生活と省エネルギーを実現していることは大変興味深いことであり、今後、他地域へと継続をしたいセミナーでした。

■ 住宅部会交流会

北海道支部・住宅部会、北陸支部・富山地域会、東海支部・静岡地域会、愛知地域会 - 住宅研究会、九州支部・福岡会・住宅部会、関東甲信越支部・長野地域会、関東甲信越支部・住宅部会の計16名が参加しました。webサイト、一般セミナー、勉強会、若手建築家座談会、展示会そして建築家カタログ等の活動紹介を通しての情報交換から始まり、地域会の住宅部会立上げや一般セミナー立上げの際の広報方法等の活発な意見交換があり、更にJIA会員の増強について等々、そして今後の「建築家大会」での交流会を継続すること。全国の住宅建築家の情報交換の場であると同時に、それぞれの「地域特有の建築・住宅」について情報交換が有意義であることを確認した3時間に及ぶ交流会でした。

〈寺山建築工房〉

復興と今後の建築・まちづくりに必要な視点と手法
「3.11とグローカルデザイン」シンポジウム

デザイン部会
部会長
連　健夫

2012年12月1日、横浜バンカート（BankART studio NYK）にて「3.11とグローカルデザイン」シンポジウムが行われた。東日本大震災復興において、課題や問題が顕在化、先鋭化し、パラダイムシフトへの対応が必要、かつスピーディーにすることが明確になってきた。この軸となるのが、グローバル（地球化）とローカル（地域化）の意味を併せ持つグローカルデザインである。2011年UIA東京大会でのシンポジウムの成果を共著:「3.11とグローカルデザイン」(鹿島出版会)としてまとめ、今回、更に気鋭の建築家を加え、議論を深めるべくパネルディスカッションを実施した。

新居千秋氏は大船渡のリアスホールや由利本庄市のカダーレを通し、市民参加のワークショップでの偶発性の力、それを形にすることによるサイトスペシフィックな建築の考えを示した。加茂紀和子氏は伊那東小学校のワークショップにおいて、参加者の隣接住民から土地の提供があり、設計の途中で敷地が変わった体験を紹介し、ワークショップが設計条件そのものを変える力があることを説明した。井口浩氏は原発や無縁社会の問題は関連しており、現在社会のお金に使われている問題を指摘し、その解決としてミレニアムシティを通し環境に配慮した計画や「ゆるコミ」の多元的多様性の良さを説明した。松原弘典氏は鹿児島県口永良部島の古民家改造を通して、仮設的な関与により状況を変えることができること、コンゴの学校づくりワークショップを通して人や材料はローカル、アイデアはグローバルであるという視点を説明した。山下保博氏は車輪が付いた移動式仮設住宅「モバイルすまいる」が店舗やイベントなどにも使われ、仮設性と移動性が有効であることを紹介した。また塩から酸化マグネシウムのブロックをつくり建築にするプロジェクトを紹介し、地元のものから新たなものを創ることを「再編集」という言葉で説明した。山本想太郎氏はグローカルデザインを「共有、相対化、継続」の観点で分析し、自身の作品を説明した。越後妻有アートトリエンナーレでの古建具を使ったオブジェは地元の仮設店舗としても使われ、妻有田中文男文庫のプロジェクトではアートと文庫を通して地元と来訪者双方に共有化されているとした。

コメンテーターの長島孝一氏は、1999年のUIA北京大会で氏が提唱した「グローカルアプローチ」が、今においては建築のみならず様々な分野に使われており、有効な視点であることをコメントした。渡邉研司氏は、優れた近代建築には地域特性が反映されていることから、インターナショナルスタイルと地域性との関係を説明すると共に、パネリストの視点にパラダイムシフトに対する多くのヒントがあることを指摘した。

ディスカッションでは、デザイン手法における様々な視点が表出した。「ワークショップ、仮設性と移動性、異なる立場の繋がりと再編成、参加のデザインにおける身体性、アートにおけるボーダーレス」などである。これらは、今まさに被災地復興において必要なものである。高台移転における画一的な事業の問題が指摘されているが、地域の実情に合った規模や認可の多様な判断が求められている。災害公営住宅では古典的な板状集合住宅の並行配置の問題が指摘されており、地域のヴァナキュラー性に配慮した有機的なデザインや、将来の機能変化に対応する可変性などが求められている。中心市街地における区画整理事業は時間がかかるが故に、仮設店舗やアートワークによるにぎわい創出などが求められ実施されている。このシンポジウムで浮き彫りになった視点や手法が建築家のみならず、行政や市民など様々な立場で共有されることが必要であろう。

〈連健夫建築研究室〉